

第31回日本ウマ科学会学術集会のお知らせ

会期：2018年12月3日（月）11：00より

12月4日（火）9：00より

会場：国際ファッションセンター（KFC Hall & Rooms）

〒130-0015 東京都墨田区横網1-6-1（TEL：03-5610-5801）

プログラム：

12月3日（月）一般講演，ランチョンセミナー，企業展示，JRAとの合同懇親会

12月4日（火）一般講演，JRA・日本ウマ科学会合同シンポジウム，優秀発表賞候補講演，2018年学会賞受賞講演，2018年奨励賞受賞講演，臨床委員会企画症例検討会，ランチョンセミナー，定時総会，企業展示

なお，12月3日（月）は，第60回JRA競走馬に関する調査研究発表会が併行開催されます。

参加費：会員5,000円 非会員7,000円 学生2,000円（学生証をご提示ください）

* 事前登録はありません。当日，受付（KFC Hall：3F）にてお支払いください。

【JRA・日本ウマ科学会 合同シンポジウム】（KFC Hall：12月4日（火）13：10-15：40）

座長：松田芳和（JRA馬事部）・中西信吾（日本軽種馬協会）

テーマ：競馬産業の国際化—これまでの取組みと将来—

- ・日本のPartI 国入りまでの道のり 山野辺 啓（JRA馬事部）
- ・（JPN）を国際ブランドに 松田 薫（日本軽種馬協会 業務部）
- ・施設面から見た各国の競馬場 高田順一（JRA施設部）
- ・安全な国際間移動の仕組みづくり 山中隆史（JRA馬事部）
- ・海外から見た日本競馬 吉田直哉（ウィンチェスターファーム）
- ・総合討論

【2018年奨励賞受賞講演】（KFC Hall：12月4日（火）10：00-10：30）

座長：田谷一善（日本ウマ科学会副会長）

テーマ：重種馬における子宮疾患に関する研究

講演者：滄木孝弘（帯広畜産大学）

【2018年学会賞受賞講演】（KFC Hall：12月4日（火）10：30-11：00）

座長：青木 修（日本ウマ科学会会長）

テーマ：馬のバイオメカニクスに関する研究

講演者：高橋敏之（JRA競走馬総合研究所）

【臨床委員会企画 症例検討会】

(Room 101-102：12月4日(火)9:00-11:00)

座長：宮越大輔 (NOSAI みなみ 家畜高度医療センター)

テーマ：馬の新生子内科疾患

パネリスト

1. 滄木孝弘 (帯広畜産大学)
高齢の母馬 (輓系) から生まれた子馬の管理
2. 宮越大輔 (NOSAI みなみ 家畜高度医療センター)
新生子馬不適応症候群の原因と治療に対する検討
3. 大久保正人 (ノーザンファーム)
一牧場における HIE に対する早期診断・治療
4. 小笠原慶 (NOSAI みなみ 西部家畜診療センター)
新生子溶血症 症例報告
5. 敷地光盛 (エルムホースクリニック)
新生子における屈曲異常と甲状腺ホルモンについて
6. 遠藤祥郎 (JRA 日高育成牧場)
オキシテトラサイクリン投与後に急性腎不全を発症した新生子馬の一症例

【問い合わせ先】

○日本ウマ科学会事務局

【ADD】 〒329-0412 栃木県下野市柴 1400-4

JRA 競走馬総合研究所内

【TEL】 0285-39-7398

【FAX】 0285-44-5676

【E-mail】 e-office@equinst.go.jp

○学術集会担当：石田信繁 (JRA 総研 企画調整室)

【E-mail】 noishida@equinst.go.jp

馬事往来

イギリスの旅

—エクスムーアポニーを訪ねて—

高草 操



高草 操 (たかくさ みさお)

フォトグラファー。馬や馬に関する人、風土など「日本の馬」をテーマに日本の在来馬や古来の馬産地・岩手県遠野をテーマに撮影を続ける一方で、競馬、馬術競技、流鏝馬なども撮影。写真展は、コニカミノルタプラザ、馬事公苑ホースギャラリー、遠野蔵の道ギャラリー、宇フォーラム美術館などで開催。著書に「遠野馬物語」(里文出版)。第1回遠野市馬事文化賞。

数年前、私は10年かけて撮影した日本在来馬の写真展を開催しました。その写真展に、毎年ジャパンカップの時期にイギリスから来日する友人の女性カメラマンが足を運んでくれたのです。彼女は日本の在来馬にとっても興味を持ち、イギリスにも「Native Horse」つまり在来馬とよばれる馬たちがいることを教えてくれました。その中のひとつがエクスムーアポニーです。それは私も以前から撮影してみたいと思っていた馬でした。エクスムーアポニーは、イギリスの荒野に野生状態で暮らし、モンゴルのタビ(モウコノウマ)や東ヨーロッパのタルパンに次いで原始の遺伝子をもつ最古の馬の一種といわれています。いろいろな本でみると、黒い豊かなタテガミをもつ鹿毛馬で、日本の木曾馬にどこか似ているという印象です。

「是非、イギリスに来てください。一緒にエクスムーアポニーを訪ねましょう」。来日するたびに、友人はそう言うてくれました。そして昨年(2017年)9月、念願かなって、私はイギリスを訪ねることができました。

イギリスの旅は、彼女が細かに計画してくれました。「馬ぐるい」の彼女と私。英語では「馬ぐるい」のことを「Horse Mad」というそうですが、私のイギリス滞在中、彼女は出来る限り馬がいる場所に私を連れて行ってくれました。もちろん、メインは今回の一番の目的であるエクスムーア(Exmoor)国立公園と、イギリスのもう1つの在来種がいるダートムーア(Dartmoor)国立公園です。エクスムーアとダートムーアへの旅は、彼女のお姉さんも同行し、女性3人の3泊4日の車の旅となりました。

早朝4時、まだ真っ暗なロンドンを出発して西へ向います。最初の目的地はWhatcombe。日本でも種牡馬

を勤めたイギリスのダービー馬・ジェネラスを育てた調教師・Paul Cole氏の厩舎です。まだ薄暗い朝6時半、友人の計らいで、馬たちの調教を撮影させてもらいました。Whatcombeを後にして、さらに西へ。次々に現れるイギリスの田園風景や古い町並みは絵葉書のようなようです。カントリーサイドの中でも屈指の美しさといわれるコッツウォルズ(Cotswolds)地方のレイコック(Lacock)という村にも立ち寄りしました。13世紀に建てられたという有名な修道院レイコックアビー(Lacock Abbey)は「ハリーポッター」を始め数々の映画のロケ地になったそうです。けれども、中を見学せずに外観を見るだけで終わりました。なぜなら「馬がないから」。私たちは「Horse Mad」です。じっくり車をとめて見物したのは、丘の壁面に掘られた馬の地上絵が見える場所でした。「White Horse」とよばれるその馬は、イギリスには多く見られるそうですが、最も古いものは2,000年以上も前に掘られたアフィントン(Uffington)の絵だそうです。私が見たのは比較的



丘に刻まれたホワイトホース

新しいもので、1780年にCherhillという丘に掘られた白馬でした。これもイギリスのミステリアスな風景の1つ。友人がわざわざここに連れてきてくれたことに感謝です。

私たちがエクスムーア国立公園に着いたのは、夕方5時過ぎでした。おそらく高速道路を使えば、ロンドンから3時間～4時間ほどで着く場所なのかもしれませんが、友人のおかげで、私は1日にして多くの「イギリスの馬」を味わった気分になっていました。

翌日はいよいよエクスムーアポニーに会いに行きます。友人がガイドをお願いしてくれました。ガイドをしてくれるのは、私たちが宿泊したホテルのオーナーであり、写真家でもあるPeter Hendrie氏。ランチと写真講座付きの1日ツアーです。エクスムーア国立公園は車なしでは回ることはできません。朝9時、Hendrie氏の車でホテルを出発、丘を登っていきます。登るにつれて風景が変わっていきました。大きな木は1本も生えておらず、枯れたような草に覆われたなだらかな

丘が幾重にも重なっています。所々にピンクや赤紫の小さな花の群落がありました。「ヘザー (Heather)」という荒野に咲く花で、開花のピークとなる7月から8月は、丘が花の色に染まって美しいそうです。「Moor」とは、このヘザーが生えた排水の悪い高原、つまり「荒野」という意味なのです。

ヘザーの群落の向こうに、こちらの様子をうかがっているものがありました。エクスムーアポニーです！！車を止め、Hendrie氏の指示に従いながら、馬に近づきました。そこには6頭ほどの馬たちがいました。1頭の牡馬に数頭の牝馬、そして今年生まれた子馬でした。皆、同じような毛色、姿形をしています。なんてきれいで、愛らしい馬たちなのでしょう。「彼らは非常に臆病で人間を警戒している」とHendrie氏が言います。近づき過ぎないようにしてレンズを向けて撮影しましたが、やがて彼らはお尻を向けて走り去って行きました。ほんの10分くらいの間でしたが、私は彼らにひと目ぼれしてしまいました。少し車を走らせると、また別の群れがいました。ヘザーのピンク色の群落に、馬



エクスムーアポニー (1) ヘザーの群落とポニー



エクスムーアポニー (2) シャッター音に驚き走り去る群れ



エクスムーアポニー (3) 荒野に佇むポニー



エクスムーアポニー (4) ふりむくポニー

たちの輝くような褐色の毛色が映えます。

本などでエクスムーアポニーの写真を見たときは、日本の木曾馬に似ていると思ったのですが、実物の彼らの印象は少し違いました。鹿毛や赤褐色の毛色は、

透明感があり、陽が当たるとメタリックな光沢があります。夏は冬毛がないため、ツヤのある美しい馬体だということです。体のどこにも白い部分、流星や星がなく、日本の在来馬同様、それこそが雑種化されてい



エクスムーアポニー (5) モンゴルの大地を思わせる荒野

ない馬たちの証です。また、エクスムーアポニーには、ひと目でそれとわかる特徴があります。それは私がおっとも魅力的に感じた彼らの目です。サラブレッドなどに比べて広い額と大きな目。彼らを紹介する英語の文献などでは、厳しい自然や気候に耐えられるよう厚いまぶたをしているため、「toad eye」、つまり「ヒキガエルの目」と表現されていますが、その例えはあまり好きになれません（もちろんカエルもかわいいですが…）。目と鼻孔の周りだけが白っぽく（黄褐色）なっていて、遠くから見ても目立ち、それも愛嬌に思えます。

その後、いくつかの場所でエクスムーアポニーの群れに会うことができました。広大な国立公園にはポニーのほか、野生の鹿や家畜である牛、羊などが放牧されており、それぞれのテリトリーをもって暮らしているそうです。ポニーは野生馬のように見えますが、すべての群れには飼い主がいるといいます。ここで少しエクスムーアポニーの歴史について触れてみたいと思います。

エクスムーアポニーの祖先となる馬たちは、氷河期時代が終わり、森や草原が出現した時代になっても環境に適応して Moor とよばれる丘で生き延びてきたといえます。氷の下に残っていた当時の馬たちの骨を解剖学的、生態学的、考古学的に検証した結果、現存するエクスムーアポニーの歯の構造や体の随所に太古の馬同様の痕跡が残っているというのですから、ただ驚くばかりです。「British Hill Pony」としてマンモスやその他の動物たちの中で暮らしていた馬たちは、人間にとって「食料」であり、狩の対象でした。けれどもイギリスに入植してきたケルト人が馬といっしょに馬具を持ち込んだことによって「British Hill Pony」の運命が変わりました。車輪を牽くようになり、人々の交通手段になったのです。けれどもそれは彼らのほんの一部でした。

11世紀初頭、馬たちが暮らしていたエクスムーアは王家の狩場「Royal Forest」となり、馬たちは森の管理人や土地の所有者に委ねられました。これがエクス



エクスムーアポニー (6)
ポニーの親子。逃げずにモデルになってくれた。

ムーアポニーの本格的な家畜化といわれているようです。けれども「British Hill Pony」として祖先から受け継がれてきた血は絶えることはありませんでした。時を経た1818年、森の管理人だったAcland家は「Royal Forest」を家畜とともに売りに出しました。けれども純粋な血統をもったエクスムーアポニーの群れだけは売らずに残したのです。さらに、エクスムーアの農民たちが所有していた純粋な馬たちもそのままエクスムーアにとどまりました。エクスムーアポニーの純系を保とうとする人がいる反面、異系の品種の馬を交配させて改良を試みた人もいましたが、雑種化された馬たちは体が弱く短命で、成功には至らなかったようです。こうしてイギリス在来種としてエクスムーアポニーの血は、脈々と守られたのでした。

エクスムーアの人々は、おそらく世界中がそうだったように、トラクターや乗り物が普及する以前は馬の力によって農作業や土地の開墾を進めました。また馬たちは乗用馬としても多才な能力を発揮しました。一方で、野生状態の中で生まれる子馬は毎年秋に開かれるセリにかけられ、人々により収入をもたらしてくれたのです。

しかし、受難の時期が訪れます。第二次世界大戦が始まり、エクスムーアポニーは地域のパトロール隊として駆り出されました。そして、町で飢えた人々のお腹を満たすために連れ去られ、ときには盗まれていったのです。そのため終戦(1945年)のころにはたった50頭しか残っておらず、その中で牡馬はほんの数頭。まさに絶滅の危機に瀕していました。そのとき地元の



エクスムーアポニー (7)
ヘザーとポニー。まっすぐな瞳が愛らしい



ヘザーとゴース。荒野に咲く花。ピンク色の花がヘザー、黄色い花がゴース。

生産者の女性が2頭のポニーを連れてロンドンの動物園に行き、種の保存を訴えて奔走したのです。世論を味方にして、エクスムーアポニーは次第に数を増やしていきました。現在は、農民によって設立されたエクスムーアポニー協会(The Exmoor Pony Society)が、雑種化を防ぎ、品種を維持するための登録事業や、公式イベントへの参加、そして毎年10月に行われるポ



ダートムーアポニー (1) 奇岩の多いダートムーア。いろいろな毛並みの馬がいる。

ニーフェスティバルの運営を担っています。

この10月のポニーフェスティバルがどういうものか、よくわかりませんが、それぞれの飼い主が荒野で自由に暮らす馬たちを集めて自分の牧場へ戻し、子馬の検査やセリにかけ馬を選ぶ作業をするようです。このセリによってエクスムーアのポニーの一部が、地元の乗馬センターやイギリス各地、さらにヨーロッパや北米へと旅立っていくのです。けれどもエクスムーアを離れた馬たちは、「British Hill Pony」として暮らしてきた習慣や個性を保つことは難しいという調査結果を示す資料もあります。

彼らは気が遠くなるほど長い間、この荒野の風雨に耐えてきました。私が訪れたのは9月初旬で、馬たちの体はツヤツヤと輝いていましたが、冬の湿った雪に覆われた馬の写真を見ました。イギリスの荒野では寒さよりも湿り気が馬の命を脅かすそうです。彼らは寄生虫から身を守り、草が少なくなる冬場には、イグサ

やヘザー、さらに「ゴース (Gorse)」というトゲのある植物まで食べて生きてきました。また、以前は狼やクマに襲われることもあったそうですが、イギリスでは狼は絶滅し、今は肉食動物に襲われることもなく、もちろん狩をする人間もいません。それでも馬たちは常に警戒を怠らず、イヌやネコにも反応するほど敏感だといわれます。土地固有の風土や環境の中で培われた Native Horse、エクスムーアポニーの強さや個性が、土地を離れると失われるという皮肉。それは日本の在来馬にも通じるものがあるかもしれません。

現在、エクスムーア国立公園では、飼い主ごとに群れをつくった1,000頭ほどのポニーが、公園内のそれぞれのテリトリーで暮らしています。

エクスムーア国立公園を後にして、私たちはエクスムーアの南に位置するダートムーア国立公園へ向いました。ここにもイギリスの在来種と言われるポニーが



ダートムーアポニー (2) ゴルフ場で草刈の役目を果たすポニーの群れ。



ダートムーアポニー (3)
比較的大きなダートムーアポニー。人にもイヌにも動じない。

います。ダートムーアはエクスムーアと同じような地形で広大な荒野が広がっていますが、ダートムーアの荒野にはエクスムーアにはない石垣や奇岩が点在していて、独特な景観です。それゆえにアガサ・クリステイ

の小説やシャーロック・ホームズの舞台にもなった人気の国立公園だそうです。ここでは長年ダートムーアポニーの生産やPRに関わってきた女性がガイドをしてくれました。ダートムーアの馬たちは、純系を維持するエクスムーアポニーと違い、いろいろな品種がミックスされた馬たちで、以前は安価に売買されていたといいますが、現在はライディングポニーとして高い評価を受けているとのことでした。国立公園中心部のヘイトア (Haytor) を境に、少し大型のポニーが暮らす地域と、小型のポニーが暮らす地域に分かれています。小型のポニーたちは、イギリス在来馬の一種・シェトランドポニーを交配しているとのことですが、この群れがゴルフ場の草刈の役目をしながら暮らしているのを見たときは、そういう活用方法もあるのだと、感心してしまいました。

ダートムーアポニーは現在約900頭が、国立公園内で暮らしているそうです。



ニューマーケットの調教風景



ウィンザー競馬場

在来馬を訪ねる旅を終えたあと、友人がニューマーケットにも連れて行ってくれました。馬関係者なら一度は訪ねたいと思う聖地ニューマーケットのすばらしさや感動は、私がここで敢えて語る必要はないでしょう。今回のイギリス訪問では、彼女のホームグラウンドであるウィンザー競馬場や厩舎、調教シーンなど、

短期間の間にイギリスの馬世界を味わうことができました。その上で、やはり一番印象的だったのは、エクスムーアポニーの統一された美しさです。そして、同じイギリスの Native Horse として荒野に住んでいても、原始の血統を守り続けるエクスムーアポニーと、雑種化しても乗用馬として活路を見出したダートムーアポニーの生き方は全く違うことに驚くばかりです。そして彼らもまた、日本の在来馬同様、戦争や絶滅の危機を乗り越え、人々の努力によって生き延びてきたことを知りました。馬は人間との大きな関わりの中でそれぞれの道を生きているのだと改めて感じます。是非、ほかのイギリスの Native Horse にも会ってみたいと思いました。

参考文献

- ・アルティメイト・馬，緑書房。
- ・Exmoor Ponies Survival of the Fittest, Exmoor Books.
- ・Guide to the Horses of the World, Elsevier Phaidon.
- ・Horse And Pony Breeds, Ringpress Books.
- ・Guide to Horses, Reed International Books Limited.

馬事往来

馬は友達 オホーツクの青春 —東京農業大学馬術同好会の歩みから—

郷倉嘉夫



郷倉嘉夫（ごうくら よしお）
東京農業大学職員，東京農業大学オホーツクキャンパス馬術同好会監督，オホーツクホーストレッキング研究会事務局長。1978年，東京都世田谷区生まれ。小学5年生から高校3年生までJRA馬事公苑の弦巻騎道スポーツ少年団に所属し，副団長，団長を経験。東京農業大学オホーツクキャンパスに進学し，馬術同好会で活動。卒業後は母校に就職，2006年4月に世田谷キャンパスからオホーツクキャンパスに転勤し，馬術同好会の監督に就任。平日は学生の履修成績指導を行い，休日は牧場で学生の乗馬指導にあたっている。

目の前に広大な草原が広がり，その奥には北海道ならではのジャガイモや小麦畑が見渡せる風景。そんな中に馬が数頭，鞍を付けたまま放牧されている。

「おーい，お客さんが来たから馬3頭連れてこいや」

その声に反応して数名の若者が手に手綱を取り，広場に放牧されている馬を捕まえに足早に飛び出していった。

ここは，北海道網走市にある「網走原生牧場観光センター」。ホーストレッキングを楽しむことができる観光牧場だ。若者達に指示を出しているのはこの牧場の自称「馬のおじさん」こと小西行悦（こにしゆきてる）さん，74歳。若々しいその声に従う若者達は東京農業大学オホーツクキャンパスの馬術同好会の学生達である。

まずはこの状況をもう少し詳しく説明しよう。

北海道体験にチャレンジ

網走市は北海道の東部に位置し，網走監獄や冬の流水で有名な観光地である。この地に1989年，東京農業大学が生産，加工そして流通を通して学ぶことができる文理融合型の学部として生物産業学部とオホーツクキャンパスを設置した。現在は北方圏農学科，海洋水産学科，食香粧化学科および自然資源経営学科の4学科体制となり，約1,600名の学生が学んでいる。学生のうち道内からは1割程度，残り9割が道外の出身者で，南は沖縄県から北は青森県まで全国各地から集まり，4年間の網走での青春を謳歌している。

このオホーツクキャンパスに馬術同好会がある。サークルの創設メンバー達は「せっかく北海道に来たのだから，北海道らしいことがやりたい。北海道といえは乗馬だ！」ということで，網走近郊で馬を扱っ

ている牧場を片っ端から訪ね，網走原生牧場観光センターに辿り着いたようだ。そして牧場の作業を手伝う代わりに安く馬に乗せてほしいと交渉した結果，馬術同好会が1990年に10名の学生で結成された。その後約30年にわたり毎年多数の新入生が入り，現在は約60名が在籍している。結成当初から部活動ではないサークルだが，皆「馬部（うまぶ）」と呼んでいるので，以下「馬部」と表記したい（写真1）。

さて，そんな馬部と私との出会いは，1998年の4月のことだった。私は小学5年生から東京のJRA馬事公苑の弦巻騎道スポーツ少年団に高校3年生まで所属し，馬場馬術や障害馬術等のブリティッシュ競技馬術界の末席に籍を置いていた。そんな私が進路に選んだのが東京農業大学のオホーツクキャンパス。実家に近い同



写真1. 馬部の活動拠点「網走原生牧場観光センター」の建物施設。学生や小西さんの休憩所となっている列車を改造したトレビンガロー（中央と左）とレストラン（右）

じ大学の世田谷キャンパスではなくオホーツクキャンパスを選んだのは、当時の受験戦争の激しさを察していただきたい。

私は大学生活では馬術ではなく、何か新しいものにチャレンジしようと思っていたのだが、クラブ活動の新入生勧誘の先輩方に取り囲まれ、連れていかれたのが馬部のブースだった。私が経験者であることを知ると先輩方は「とにかく1回牧場に来てほしい。今日これから行こう」

ということで、半ば強制的に牧場に連れていかれた。大学から車で約20分。そこで私が見たものは、冒頭で述べたように広い敷地に数頭のハミとウェスタン鞍を付けたまま放牧された馬たち。すると遠くからスクーターに乗ったおじさんが現れた。

「新入生かい。故郷(くに)はどこだい？ おお東京か。シティーボーイなんでしょ。え、経験者なの、じゃあ、あの馬に乗ってついて来い」

と話がどんどん進み、おじさんと2人で馬に跨ることになった。最初は常歩で穏やかだったのだが、「走るぞ。ホイ！」

掛け声と共に脚を入れ、次の瞬間には駈歩で行ってしまった。慌てて追いかける私。アップダウンのきつい丘を駈歩で走り回り、枝をよけながら林の中を駈け回る。これまで馬場の中から出たことのない私にとっては、全てが新鮮な経験だった。

「お前よくついてこられたな。ずいぶん乗れるな」と最後に褒められた。

これが私と小西さんとの最初の出会いだったのを今でもはっきりと覚えている。馬に乗っている間は、必死だったため気付かなかったが、馬から降りて冷静に状況を確認すると理解しがたいことが周りにたくさん転がっていた。なぜ手綱が着脱式なのか。厩舎や馬房はどこにあるのか。さっき走った所はどこなのか。そもそも何故馬装された馬が放牧されているのか。疑問は色々と残るものの、私は馬部への入会を決め、先輩たちに伝えると、

「ありがとう。俺らもあまり馬に乗ったことがないから、今度教えてね」

私と馬部の関係はこうして始まり、卒業後は「監督」という立派な立場までいただき現在に至っている(写真2)。

地域活性化にも一役買う

牧場での仕事は主に乗馬の接客、馬の飼養管理および施設の修繕等があるが、基本的には小西さんが指揮を取り、学生がその指示に従って手伝うというのが主な内容である。毎日の最初の仕事は広い放牧地から馬を集めることで、片手に追い鞭を持ってスクーターに乗り大声を張り上げながら馬を小さな牧柵の中へ追い込む。厩舎や馬房はなく馬具の保管や雨風、風雪が酷い時に馬が避難する小屋で馬装を行い、お客さんから見える放牧地に放して草を食べさせる。お客さんが来ると着脱式の手綱を持って馬を捕まえ、ホーストレッキングコースのガイドや引馬等で接客を行い、馬に乗る技術やガイドの経験を重ねるとより高度で時間の長いコースのガイドを任せられるようになり、それが学生にとってはステータスにもなっている(写真3、4)。

暇な時間があれば馬に熱心な学生は乗馬の練習に励み、それほど熱心でない学生は野球やサッカーを行うなど思い思いの時間を過ごし、夕方になると馬を小屋に追いこんで馬装を解いて広い放牧地へ馬を帰す。こんな毎日が四季折々の中で続き、真冬のマイナス20℃の中でも同じような光景が見られる。

このような牧場での仕事に加え、地元の官公庁、企業および市民で構成するオホーツクホーストレッキング研究会の活動にも協力している。この団体はホーストレッキングによる地域の活性化を目指しており、年に3回のイベントや一般市民向けの乗馬教室を行っている。小西さんと私がこの会の役員を務めているた



写真2. 観光客にも素早く対応できるように、馬装して放牧されている愛馬たち



写真3. 牧場の乗馬担当で「網走の父」として学生に慕われている小西さん。広い牧場を駆け回るスクーターも欠かせない



写真4. 「夏だね。一緒に帽子をかぶるかい」と愛馬を気遣う小西さん



写真5. 広々とした放牧地では、愛馬たちがのんびり

め、数名の学生が「学生役員」として馬の準備やボロ掃除等のスタッフとして参加している。学生役員は会議等にも出席し、会の運営を通してイベント企画について学べるほか、地元の人々と交流することで、いろ

いろな恵みをいただいている。釣りや山菜取りの穴場をこっそり教えてもらったり、さらには、ここでの活躍が功を奏し就職が決まった学生もいたほどだ（写真5～7）。

生命の尊さと重さを学ぶ

馬部の学生のほとんどが入会するまで馬に触れたこともない乗馬未経験者だ。そんな学生たちは日々の乗



写真6. 牧場から至近距離の砂浜に出て駈歩に息を弾ませる

馬練習や外乗で技術を高め、馬と向き合い、悩みながら成長していく。4年という期間で学生の中には乗馬に対する温度差が生まれてくるが、熱心な連中はその技術を披露する場を欲するようになり、馬部内での試合と懇親を目的とした馬部杯が誕生した。1年生から3年生をバランスよく入れたチームごとの対抗戦で、監督と4年生が審判を行う。1年生向けの馬装競争や「だるまさんが転んだ」。2年生向けのスラローム競技やジムカーナ中級（速歩のみ）、3年生向けのジムカーナ上級。ジムカーナ上級で最も成績が良い者をその年のトップライダー（個人賞）とし、その年馬部で一番上手な乗り手とされる。馬部という小さな社会で最高の名誉と後輩たちから尊敬と憧れの眼差しを浴びる瞬間であるが、その反面でトップライダーになれなかった学生たちは悔しい思いをする。2000年から実施されているが、競技としての馬術を少しだけ体験できる時間



写真7. 裸馬でオホーツクの海に突入

であり、学生達にとって貴重な経験となっている。

牧場の小西さんは日頃から「馬は機械じゃない。自分らと同じ生きものだ。人間と接するように接しなさい」と学生達へ語っている。そんな生き物としての馬を最も感じるができるのが出産だ。原生牧場には厩舎や馬房もないため自然分娩。朝牧場に行くと1頭小さな馬が増えていたなんてことが何度もあった。仔馬の誕生は学生たちにとっても新鮮であり、幸せな気分を味わうと共に、母馬の仔馬への愛情から時には人を攻撃することもあるという、本能や厳しさを知ることできる。誕生という出会いがあれば、死という悲しい別れもある。普段からお客さん相手のトレッキングや練習で元気に働いていた馬が、急に不調を訴え、数日、早ければ数時間後にこの世から去ってしまうということもある。そんな時学生たちは皆でその馬のこれまでの働きに感謝すると共に、涙を流す。「生命の尊さや重さ」について真剣に考える機会を馬達が与えてくれている（写真8～10）。

「夢の世界」いつまでも

3月は卒業の季節。ほとんどの学生は道外へ旅立っていく。馬部ではそんな4年生を送る「牧場卒業式」を行う。たまり場のトレインバンガローを手作りの装飾で彩り、2ヵ月かけて作成した世界に数冊しかない手作りの卒業アルバムを記念品として手渡す。先輩や当日出席できない在学学生から祝電が届く。校長先生役はもちろん小西さん。私も毎年見送る側として参加し



写真8. 厳寒の中、流水が接岸した海岸を行く

ている。小西さんから牧場の卒業証書を手渡され、馬部生活にピリオドを打つ。卒業生、在学学生共に感極まり声を詰まらせる。私にとっては、乗馬の教え子であり4年という短い期間だが、馬部のため牧場のために活動し、大きな声で笑い、泣き、怒り、酒を酌み交わして騒いだかけがえのない仲間たちである。社会という荒馬から振り落とされたくないよう、また例え振り落とされても再び手綱を取る勇気を失わずに頑張っしてほしいと切に願う（写真11, 12）。

大学のサークルは部活動と違い興亡が激しい。新規のサークルを作る時は盛り上がるがこれを維持することは難しい。我らの馬部はサークルながら来年で30年



写真9. 流水の塊が打ち上げられた海岸で、観光客をガイド



写真10. 秘境・知床の斜里岳をバックにトレッキング。空気が澄むと名峰がくっきり



写真 11. 馬部の「牧場卒業式」。思い出を胸に記念撮影

を迎える。馬部がここまで続いている理由、それは学生だけの集まりではないからだと思う。網走原生牧場という民間の観光牧場で、小西さんをはじめとする牧場のスタッフ、ここに訪れる日本各地からの観光客、それに小西さんを網走の父と慕う卒業生たち。これらたくさんの大人が関わりながら普遍的な乗馬、牧場の仕事を軸として、学生と一緒に盛り上げて来たことこそが存続してきた所以であろう。

現在も学生達は暇な時間があれば牧場に集まり、小西さんの手伝いで牧場の作業をする者、トップライダーを狙って乗馬の練習をする者、馬には一切触れずに野球やサッカーを楽しむ者と思えば思いの楽しみ方をしている。夕方になるとバラバラに動いていた学生たちはたまり場のトレインバンガローに集い、たわいも



写真 12. 大学の卒業式を終えた馬部学生は、晴れ着姿で愛馬に報告

ない話題で盛り上がる。20年前に私が学生として経験したことが今も変わらず続いている。学生の構成は毎年変わっても、先輩から受け継ぎ、後輩へ引き継ぐ「馬部らしさ」、いつまでも変わらない「牧場の雰囲気」、そして「馬部・牧場への思い」は、今の学生たちの中に生きている。

牧場で過ごした学生たちは卒業後、口を揃えて言う。「あの4年間は、牧場と馬部で夢を見ていたような感じだ。またあの頃に戻りたい」

18歳から22歳という社会に出る直前の子供から大人への転換期に、親元を離れて過ごすここでの青春は一生の宝物であり、まさに夢のような経験となっている。私はここに残った「夢の世界の住人」として、この馬部が続くよう、今後も微力を尽くしていきたい。

馬事往来

競馬を鉄道で読み解く 新刊『競馬と鉄道』の紹介を兼ねて

矢野吉彦



矢野吉彦 (やの よしひこ)

フリーアナウンサー。1960年生まれ。早稲田大学第一文学部卒。1983年文化放送入社、1989年からフリー。テレビ東京・BSジャパン「ウイニング競馬(旧・土曜競馬中継)」の実況は1990年4月から担当。ほかに、プロ野球(現在はニコニコ生放送のDeNA戦とテレ玉の西武戦)、社会人野球、バドミントン、アメフト、テニス、サッカーなどの実況にも携わっている。趣味は競馬、野球観戦を兼ねた旅行。これまでに訪れた競馬場の数は、国内39場、海外(20カ国)220場の計259場に及ぶ。netkeiba.comの「競馬最前線」など、コラムも多数執筆。現在は週刊競馬ブックに「今はなき競馬場を探す地図の旅」を隔週で連載中。

『ヒポファイル』ご購入者のみなさま、初めまして。テレビ東京・BSジャパンの「ウイニング競馬」(毎週土曜日放送中)でレース実況を担当しているアナウンサーの矢野吉彦と申します。実は今年4月、『競馬と鉄道』(交通新聞社新書)という本を上梓いたしました。その名のとおり、競馬と鉄道との関係を綴ったかなりマニアックな本ですが、おかげさまで6月には、めでたく重版もできています(写真1)。

さて今回、本誌に拙著紹介のための誌面数ページ分を頂戴しました。まだお読みいただいていない方も数多くいらっしゃるはずですので、ご厚意に甘えて大いに本書の内容についてご紹介させていただく次第です。なにとぞお付き合いの程をよろしくお願いします。

鉄道と競馬の深いつながり

本の中身をご紹介する前に、まずは出版に至った経緯をご披露しておきます。競馬と鉄道との間に深いつながりがあることは、けっこう前から気づいていました。車の運転免許を持っていない私にとって、競馬場へのアクセスに利用するのはもっぱら電車。「競馬場(または競馬)」の文字が入った駅は全国各地にありますし、開催日ともなれば、競馬客を運ぶ臨時電車が運行されたり、競馬場最寄駅にふだんは止まらない優等列車(特急や急行など)が臨時停車したりしています。鉄道会社の名を冠した競走も、競馬カレンダーにはなくてはならない存在です。

とはいえ、それらをなぞっただけでは、本にするほどの内容にはなりません。競馬と鉄道との関係を掘り下げたら、けっこうおもしろいものが見えてくるので

はないか? そう思うキッカケがあつてこそ、その先、ことここに至るまでの経緯につながったわけです。

では、そのキッカケとは? 拙著のまえがきには、「野球と鉄道」というテーマ展を見に行ったこと、と書きました。昭和初期の鉄道路線案内図に競馬場や競馬場前駅の表記がいくつもあつたので、「野球」を「競馬」に置き換えても、いろいろ(記事にするとか、テーマ展を開催するとか)できるに違いないと思ったのです。



写真1. 『競馬と鉄道』(交通新聞社新書)

そして、その思いをさらに強くしたのは、羽田競馬場前臨時停留場の存在を発見したから、でした。競馬と鉄道との深い関係を裏付ける古い資料を探して、国立公文書館の資料をあたっていたところ、京浜電鉄（今の京急電鉄）が羽田競馬の開催にあわせて臨時停留場を開設したことを示す文書を見つけました。

ご存知の方も多いでしょうが、その昔、東京の羽田には全国屈指の馬券売上を誇った地方競馬場がありました。競馬場があったのは、今の羽田空港国際線ターミナルのあたり。京浜電鉄穴守線（今の京急電鉄空港線）の終点だった穴守駅（のちに廃止）から沖合に向かって歩いた先の埋立地です。

ここまでお読みいただいて「エッ？」と思われませんでしたか？ 終点の先に競馬場があるのに、路線の途中に臨時停留場を開設するなんてあり得ないでしょう？ 当時の文書によれば、その場所は増田川に架かる橋の西詰、とのこと。私も、これはどこ？ どういうこと？ と思ったわけです。

そこでさらに調べを進めていくと、今の空港のあたりにあった競馬場は2代目のもので、初代は、今の大田区東糀谷6丁目、都営住宅や東糀谷公園、東糀谷保育園、区立羽田中学校がある一角にあったことがわかりました。そして、増田川というのは、その南側を北東から南西に向けて斜めに流れた後、ほぼ真南に折れ曲がり、京浜電鉄の線路と交差する堀割でした。今、この堀割の上を首都高速1号羽田線が走っています。



写真2 羽田競馬場前臨時停留場が設置された場所。京急電鉄穴守稲荷駅の蒲田寄り、高速道路の下をくぐった先にあった。

これで、羽田競馬場前臨時停留場の場所が特定できました。羽田空港を利用する際、京急でアクセスされる方は思い浮かべてみてください。穴守稲荷駅の蒲田駅寄りで線路が首都高の下をくぐっていますよね。その場所を歩いてみるとわかりますが、線路の下には、今でも増田川にあたる堀割が流れています。停留場は、線路が首都高+増田川と交差する地点の大鳥居駅寄りに設けられたのです（写真2）。

競馬・鉄道・歴史

競馬と鉄道との関係をひも解くと、競馬に鉄道の歴史が、鉄道に競馬の歴史がそれぞれ反映されていることがわかる。羽田の一件は、そういう奥の深さを私に教えてくれました。それからは、“アナウンサー業務”の合間を縫って各地の図書館などに通い、資料探しの日々。私はそういう作業が好きなんだな、ということにも気づかされました。

まあ、そんなこんなで書き上げた本です。自分で言うのもおかしいですが、「へえ〜」とか「そうだったのか」とかいうことがギッシリ詰まっています。それについて、ここに書いてしまうと本を読んでもただけなくなるかもしれませんので、本音としては書きたくないのですが、ちょっとだけご紹介しておきましょう。

あれこれ探した資料の中には、当然ながら鉄道各社の「社史」があります。これは、各社の“公式文書”と考えていいと思いますが、そこに書かれているみなさんもよくご存知の駅の開業年月日が事実と異なる例を、2つも見つけてしまったのです。

1つめは、中山競馬場へのアクセス駅として開設された京成電鉄の東中山駅。もともとは、競馬開催日に限って営業する臨時駅でした。同社の社史によると、開業は1935（昭和10）年10月4日となっています。ところが、この日に中山競馬は開催されていません。一方で、それより7年も前の1928（昭和3）年7月21日付けの東京朝日新聞には、「中山競馬場停留場新設」という京成電車の広告が載っていました。同日は、7月29日まで行われた中山競馬の初日にあたります。また、国立公文書館に残されていた京成電鉄の文書にも、7月21日から7月29日までの間（開催日は21、22、28、29日）に臨時停留場を設置するという内容の“届け出”がありました。このことからすれば、同駅が1928年7月21日に開業したことは明らかです。

京成の社史にある日付けが何を元にかかれたかは不明ですが、それは事実と異なっていると言わざるを得ません。

もう1つは、京王電鉄の東府中駅。今でこそ京王には競馬場線があって、府中競馬正門前駅が東京競馬場へのアクセス駅として大勢の競馬ファンに利用されています。でも、この支線と駅ができたのは1955（昭和30）年のこと。それ以前の京王線は、東府中駅を競馬場への主要アクセス駅としていました（写真3）。

そして同駅も、京成の東中山駅と同じく、臨時の競馬場前駅として設置されました。問題はその開業日。京王の社史には、1935（昭和10）年11月12日と記されています。しかしこの日も、東京競馬の開催日ではなかったのです。こちらの開業日は同年4月20日。それを教えてくれたのも当時の新聞広告でした。同年4月19日の読売新聞に載った京王電車の広告に、「東京競馬（臨時競馬場前駅新設）」という文言が見られます。さらに、これを裏付ける公式文書もありました。この時の競馬開催終了後、臨時駅に設けられた電車の折り



写真3. 2015年に京王競馬場線開業60周年を記念して、同線の電車に掲げられたヘッドマーク。

返し用渉り線が、信号機もなくそのまま放置されるのは危険と指摘した鉄道省の文書です。したがって東府中駅も、京王社史の記述より約半年早く開業していたことが明らかになりました。

ちなみに、京成の社史が中山競馬場前臨時停留場（今の東中山駅）の開業日としている1935年10月4日は金曜日、京王の社史にある競馬場前停留場（今の東府中駅）開業日の同年11月12日は火曜日でした。当時の中山、東京競馬は、今と同じように土、日曜日と一部の祝日に開催されていました。何でもない平日に競馬を開催することはなく、競馬開催のために設けられた臨時駅が競馬のない日に営業することはありません。近い将来、両社の社史が刊行される際には、両駅の開業日が訂正されているといいのですが…。

それはともかくとして、拙著をお読みいただければ、鉄道との関係を通して、日本の競馬史の概略がおわかりいただけると思います。そのくらい、競馬と鉄道は古くから持ちつ持たれつとの関係を保ち続けてきました。

そうそう、鉄道ファンと競馬ファンは、けっこう重なる部分が多いような気がします。時刻表の数字をたどりながら、ここから目的の場所へこんなところを経由しながらこういうふうに行ける、というルートを見つける作業は、競馬新聞の数字をにらんで狙い馬を定める作業によく似ていますよね。レースシーンや競走馬の姿を写真に収めるのが好きなファンは、鉄道写真好きの人たち、いわゆる“撮り鉄”と同じタイプ。全国各地、あるいは世界の競馬場を訪ね歩いている人たちの中には、鉄道に乗ることを楽しみにしている“乗り鉄”と言われる人が大勢いると思われ（私がそうです！）。それと、競馬場で馬券とお酒をたしなむには、車で行ってはダメ。鉄道やバスを使うしかありませんからね。

そんな、競馬と鉄道との深い関係について記した本、みなさんもぜひご覧ください。実は、今回は書き切れなかったことがまだまだたくさんあります。拙著がご好評をいただければ、それらをご披露するための続編刊行の話につながるかもしれません。あらためまして、なにとぞよろしくお願ひいたします。

特別記事

日本ウマ科学会 2017 年臨床委員会 招待講演および講習会について

中井健司, 酒井哲志, 前田昌也, 佐々木直樹



中井健司 (なかい けんじ)

うしや競走馬クリニック所属。2015年にJRAを退職後、American School of Equine Dentistryで歯科治療の基礎を学び、ケンタッキー州やニュージーランドで研修を行う。その後、カンザス州のOptions for Animalsで動物のカイロプラクティックを学び、国際獣医カイロプラクティック協会の認定資格取得。歯を含んだ馬全体のバランスを整えることをモットーに診療を行っている。

これまで日本ウマ科学会「臨床委員会」は、眼科のDr. Brooks, 整形外科のDr. Richardson, 繁殖のDr. LeBlanc, 跛行診断のDr. Dyson, 消化器のDr. White, 装蹄のDr. Scott, 麻酔のDr. MamaならびにDr. Steffey, 呼吸器のDr. Ducharmeなど馬臨床において国際的に著明な専門家を招聘して、招待講演, 症例検討会, 講習会, ラボなどを開催してきました。2017年は米国よりDr. Hydeを招聘しました。12月4日(月)に国際ファッションセンター(KFC Hall & Rooms)にて開催された日本ウマ科学会第30回学術集会では、症例検討会と招待講演をしていただきました。12月1日(金)には軽種馬生産技術総合研修センターにて獣医師に対する講習会と実習をしていただきました。12月4日(月)にはJRA美浦トレーニングセンター競走馬診療所にて講習会と実習を行いました。本稿では、その概要をご紹介します。

招聘講師紹介

Dr. Raymond Q. Hydeは、ミシガン州立大学をご卒業後、小動物臨床, 生産動物臨床など様々な経験を積まれたのち、馬専門の獣医師とされました。その後、馬の歯科を専門的に学び、約20年前にAmerican School of Equine Dentistryという馬の歯科の専門学校を設立されました。この学校はEquine Dental Technician 歯科技工士の養成を目的としているため、獣医師以外の参加者が多く、世界中から生徒が集まります。ヴァージニア州で開業獣医師として活躍される一方で、基礎コースであるIntroductory courseを年に3, 4回ほど全米各地で開かれております。約20年間に数多くの生徒を教育し、歯科分野の発展に多大な貢献をしてきました。このセミナーはホテルの会議室を講義室として使用し、実習はその周辺の牧場や乗馬クラブで行うとい

うもので、期間は約1ヵ月間です。アメリカ以外にも中南米やオセアニアでも行ったことがあります。

歯科治療は近年、米国を中心に目覚ましい発展を遂げていますが、日本においては一部の専門家を除いて、追いつけていないのが現状ではないでしょうか。今回の一連の講演および実習では、基本的な歯科疾患から歯周病に至るまで、様々な知見を惜しみなく披露していただきました。

臨床委員会症例検討会

11月28日(火)は両国の国際ファッションセンターKFCにおいて症例検討会ならびに招待講演が行われました(図1, 2)。まず午前中の症例検討会では、著者が座長を務める中、臨床現場において遭遇した症例や診断・手術手技に関する報告などについて発表されました。Dr. Hydeからは、それぞれの疑問点や改善点などについてコメントをしていただきました。発表者と演題は以下の通りです(敬称略)。

- 競走馬のデンタルケアについて
中井健司(うしや競走馬クリニック)
- 複数回の拡張処置を実施したPeriodontal disease
佐藤正人(NOSAI日高)
- 繁殖牝馬サラブレッドにおける歯科由来の副鼻腔炎の1例
前田昌也(HBA静内)
- 咀嚼面からは判別不能な歯髓炎に対する診断と治療
伊藤桃子(せりの馬診療所)

紙面の都合上、すべての発表について詳細に触れることはできませんので、特に印象に残った内容とDr. Hydeのコメントについて紹介いたします。佐藤先生の演題は歯間隙の拡張処置についてでした。隙間に食査が詰まることにより歯周病Periodontal diseaseになる

と、噛み返しが見られるようになり、ボディコンディションスコアの低下を招きます。拡張処置後に数年で再発する症例が多く、数ヶ月の間に再度の処置を必要とする症例もあり、どの程度まで拡張してもいいのか？ また間隙を充填剤で埋める方が良いのか？ などの質問がなされました。Dr. Hydeからは4 mm幅の拡張を実施することで80%の症例が改善するというデータが示されましたが、改善しないものや再発するケースもあるとのことでした。その場合は歯列の不整が原因になっていることが多いため、抜歯も検討すべきという意見をいただきました。充填剤の使用は有効で、北海道での実習で披露されました。それぞれの報告において、会場からも多くの質問がなされ、Dr. Hydeはそれぞれにわかりやすく回答してくださいました。

臨床委員会招待講演

午後からは「馬のパフォーマンスを改善するためのデンタルケア」と題する招待講演が行われました。ここでは代表的な歯科疾患から、それらがパフォーマンスにどのように影響するかについてお話ししていただきました。その中でも顎関節が健全な状態であることの重要性を繰り返し強調されていました。顎関節の周りには固有受容 *Proprioception* と呼ばれる、体の位置情報に関する神経が多数存在しており、顎関節は運動において重要な役割を果たしています。すなわち、顎関節の問題はパフォーマンスに影響するということでした。本来、顎関節から吊り下げられている下顎骨は前後左右に動くべきなのですが、不整咬合によりその動きがロックされてしまうと、顎関節に過度なプレッ

シャーがかかることになり、顎関節自体に問題が発生することになります。顎関節の問題を予防するためには、下顎骨の動きを制限しないように咬合面が整っていることが必要とのことで、斜歯の処置だけではなく、顎関節のバイオメカニクスに適した歯列のバランスを整える歯科処置である *Performance Dentistry* の重要性を強調されていました。前臼歯の前端の形を整えるビットシートについては、歯髄を露出させてしまう危険性が世界的にも議論的になっている状況です。会場からもその是非について質問が出ましたが、Dr. Hydeの見解としては、過度なビットシートには危険性があるが、ビットシートそのものは快適なハミ受けのためには不可欠であるとのことでした。

JRA 美浦トレーニング・センターにおける講習会

12月4日（月）は、JRA 美浦トレーニングセンター競走馬診療所において、馬の歯牙疾患に関する講演および実習が行われました（図3）。60名を超す受講者の中には、遠く北海道から参加された方や、競走馬だけでなく乗馬の臨床獣医師として活躍されている方もおられ、馬という動物を扱う上で、歯牙疾患を含めた口腔ケアについての関心の高さが伺われました。まず午前中は、「ウマの主な歯牙疾患に対する治療について」と題した講演が行われました。解剖学的な基礎知識から珍しい症例の紹介、最新の治療法に至るまで多岐に渡るボリュームたっぷりの講義でしたが、米国において *American School of Equine Dentistry* を運営され、数多くのウマ歯科医を育成されてきたDr. Hydeの講義は大変分かりやすく、実際の症例に基づいた診断および



図1. 症例検討会



図2. 招待講演

治療法の具体的な解説は非常に参考になりました。臨床獣医師としては、疾病に対する診断や治療という側面にどうしても注目しがちですが、こと歯牙疾患に関しては日常の飼養管理や口腔ケアにより、予防あるいは早期発見することが可能であり、そのためには正常なウマの歯牙および口腔の状態を知ることが重要であることを再認識しました。

午後は、「ウマの口腔内検査法および歯牙疾患治療法」と題した実習を行いました。実習内容は、①乗馬を用いた口腔内検査法、診断法のデモンストレーショ



図3. JRA 美浦トレーニングセンター競走馬診療所

ン（図4）、②乗馬を用いた歯牙疾患治療法のデモンストレーション、③解剖体を用いたハンズオン実習という構成でした。検査診断法のデモンストレーションでは、ウマを保定する際の注意点から触診のポイント、口腔内の特に注目すべき箇所などについて解説していただきました。今回はデモということで、枠場保定下での実施となりましたが、通常は馬房内で、ウマと1対1で処置を行うことも多いという先生のお話には、競走馬と乗馬との違いはあれども驚きを禁じえませんでした。また、Dr. Hydeが使用されているオリジナルの開口器は、アルミ製で大変軽く、少ない力でウマの口を開かせることができる構造となっており、そのアイデアやより良い歯科治療を行うための飽くなき探求心には感心させられました。実際の症例馬を用いた治療法のデモでは、主に狼歯および隠れ狼歯（blind wolf teeth）の処置について解説していただきました。競走馬でも問題になることが多い歯牙異常であり、実際の処置法を目の当たりにできたことは、参加者にとって貴重な経験となったことと思います。解剖体および頭蓋骨を用いたハンズオン実習は、パワーツールなどの治療器具の使用法について、先生の指導を受けながら実際に体験する機会となりました。初めての経験となった受講者も多かったようですが、Dr. Hyde ならび



図4. JBBA での獣医師を対象としたデモンストレーションの様子



図5. JBBA でのと参加者の集合写真

に奥様であり上記スクールの生徒でもあった Hanina さんの熱心な指導により、その実用性の高さを実感し、早速購入を検討し始めた方もいたとかいえないとか。実習は予定された時間ぎりぎりまで大いに盛り上がり、大変充実した内容となりました（図5）。

一昔前までは、ウマ（特に競走馬）の歯科診療といえば、とりあえず片手開口器を突っ込んで尖った歯を削る程度のものでしたが、日本のウマ関係者にも、歯や口腔の状態がウマのパフォーマンスに影響を与えることが広く認識されるようになり、正確な診断に基づく適切な処置が求められる時代になりました。我々獣医師が学ばなくてはならないことは少なくありませんが、その点において今回の講習は極めて有意義であり、日本におけるウマ歯科医療を大いに前進させる端緒となることを確信しております。

静岡における生産地生産者向け講習会、獣医師向け講習会および Wet Lab.

Dr. Hyde と Mrs. Hanina には 11 月 29 日午後には静岡内へ移動していただき、翌日 30 日午前中に Wet Lab. の打ち合わせをしてもらい、夜には宿泊ホテルにて生産者向けに講演していただきました。この講演会は前もって要望していた「歯を含めた口腔衛生環境を適切に維持するための日常管理」というテーマで、日本軽種馬協会（JBBA）との共催で行われ、100 名以上の参加者が集まりました。テーマに沿って環境細菌などから口腔・歯牙疾患につながるリスクなど「歯」という範疇にとらわれない内容で話をしていただき、会場からは

ハミを装着している時の注意点、不正咬合（カケス）の処置後の管理などに関する活発なご質問をいただきました。

翌日 12 月 1 日はまず午前中に「口腔内の検査法および歯牙疾患の診断法」というテーマで獣医師向け講習会が開かれました。主には歯周病 periodontal disease を取り上げ、歯槽間隙への処置、抜歯の手順などとともに、日用雑貨品などをデンタルケアに流用する情報なども提供してもらえました。スマートフォンにつなぐカメラが非常に安価でインターネットでも入手できるから、口腔内の検査に使えばいいなどの、現場で容易に取り入れることのできる情報は非常にありがたいものでした。

午後の実習では、はじめに生馬を使った口腔検査から処置に至る一連の流れを見せていただき、続いて解剖馬の頭部を用いた実演、後は時間の許す限り参加獣医師に頭部標本で練習をしてもらいながら、Hyde 夫妻ならびにお手伝いしていただいた中井先生から助言をしていただく形で進めることができました。

実習に用いた生馬は決して温厚な気性ではなく、鎮静処置をしていたものの、Dr. Hyde は開口器をつけないままいきなり手を口の奥まで入れて臼歯間隙をチェックし始めて、参加者が驚いてざわつく場面もありました。処置が始まると内視鏡を口腔内に入れて、接続したモニターで参加者の皆さんに見てもらおうようにしていましたが、電動歯鑑による鑑削は想像以上に積極的な印象を受けました。臼歯だけでなく切歯についても咬合を調整する目的でかなり鑑削していたように憶えています。

頭部標本による実演においても Dr. Hyde の手技は休めることなくあらゆる部位を隅々まで処置していました。我々が必要十分と考えているものは実際にはかなり足りない面が多いと感じています。

Dr. Hyde がかなり熱心の実演していただいたので、参加者の練習（若手獣医師を優先してもらいました）は夫妻の出発時刻までには終わることができず、帰り支度をする直前に皆さんへの挨拶をしていただき、実習は盛況な中で「中締め」となりました。できればこれからの招聘講師に対しては、ゆとりのあるスケジュールを組んでいただくとありがたいです。

自費で日高に駆けつけていただいた中井健司獣医師、本州から Hyde 夫妻に帯同していただいた JRA 美穂の

野村基惟獣医師，仕事を休みながら実習に来ていただいた佐藤正人獣医師，解剖頭部の収集にご協力していただいたNOSAIみなみ家畜高度医療センターの皆様，当日の設営にご協力いただいた日本軽種馬協会職員の皆様のおかげで無事日高の実習を終えることができましたことを深謝いたします。

企業展示

今年度は，国際ファッションセンター（KFC Hall & Rooms）においてプラチナ・スポンサーのEBMトレーディングジャパン株式会社をはじめとする国内14社の協賛による企業展示が行われました（図6）。今年も，スタンプラリーを企画させていただき，企業ブース7ゾーンでのサインを集めると，豪華賞品の当たる抽選会を開催いたしました。また，会場では終日コーヒーの提供を，懇親会前にはワインの提供もさせていただきました。協賛いただきました企業関係者様に衷心より感謝申し上げます。来年度も国際ファッションセンター（KFC Hall & Rooms）でさらに広い会場を使用したの開催となることから，企業展示スペースをゆつたりと確保できる予定です。会員の皆さまへのサービス提供を充実させてまいります。



図6. 企業展示会場（国内14社の協賛による企業展示）

結語

国際ファッションセンター（KFC Hall & Rooms）での招待講演ならびにJRA美浦トレーニングセンター競走馬診療所での講習会の模様をDVDとしてライブラリー化しました。DVD販売の申し込み方法については，日本ウマ科学会ホームページなどにてご案内させていただきます。また，2018年の臨床委員会では，新生児内科学の獣医師を招聘して軽種馬生産技術総合研修センターならびに関東周辺での講習会を予定しております。会員の皆様のご参加をお待ち申し上げます。

会員通信

Journal of Equine Science 掲載の科学論文が theHorse.com で紹介されました

『Journal of Equine Science (JES)』を読んでいますか？
 “ジェイ・イー・エス”は、日本ウマ科学会が『Hippophile』と併せ年4回発行している学術雑誌です。科学論文は英語で書くことが国際基準なので、JESの学術記事（論文）も全て英語で書かれており、またその内容には専門性があるので、皆さんの中にはあまり読まないという方もいるかと思えます。研究者として働いていた経験のある私も、実際のところは自分が専門とする分野以外の論文はこのHippophileに掲載された和文要約を読むことで済ませることが多く、恥ずかしい限りです。

ところでこのJES、印刷物として会員に配布されているだけでなく、電子ジャーナルとしてJ-STAGEおよびPubMed Central (PMC)にも掲載されていることは皆さんご存知でしょうか？ J-STAGEは日本の科学技術振興機構が運営するプラットフォームであり、PMCは米国の国立医学図書館 (NLM)などが運営するアーカイブです。どちらにも科学関係の論文や情報が幅広く掲載されており、JESの論文も過去に遡って全てここに保存されています。そして何時でも何処でも誰でも、インターネットを介して無料で読むことができます。今回のJESに掲載された論文が海外の雑誌で紹介された経緯も、このPMCを介して論文を読んだ記者が内容に興味を持ったからだと思われま。

“the HORSE”を発行している米国の出版社（ケンタッキー州レキシントン市）のHPには馬の健康に関する記事が随時掲載されていますが、2018年5月28日付で記者の1人であるChrista Lesté-Lasserre氏が、JES28巻4号（2017年12月号）に掲載された（公財）競走馬理化学研究所の戸崎晃明博士らの論文を以下のように紹介しています。<<https://thehorse.com/158232/scientists-pinpoint-equine-body-weight-genes/>>

「“科学者が競走馬の体重遺伝子を同定！”飼養管理や調教などが、競走馬の体重に大きな影響を及ぼすことは知られているが、他に大きな影響を及ぼす因子として遺伝子がある。最近、日本の科学者は、馬ゲノムプロジェクトの研究成果を利用し、ゲノムワイド関連解析という手法により、サラブレッド競走馬の体重に影響を及ぼす4個の遺伝子（*LCORL*, *ZFAT*, *TRIB2*, *MSTN*）、つまり“体重遺伝子”を同定した。責任著者である戸崎博士は、「同定した4個の遺伝子によって体重全体の約17%を、性別情報を加えることで、体重全体の30%を説明できる。これらの遺伝情報を応用することで、競走馬の健康および福祉を目的とした遺伝子レベルの精密育種を可能にする」と述べている。」

日本人の研究成果を海外の雑誌記者（研究者でない！）が読み、それが記事になることで世界中の馬愛好家や馬好きの目にも触れるかと思うと、JESの編集に携わっている1人として満足感に浸ることができました。

実は、今回紹介した戸崎博士の記事以外にも、これまでにJRAの平賀博士の論文や麻布大学の山田教授の論文も同じように“theHorse.com”上で紹介されています。<<https://thehorse.com/19951/scientists-revisit-historic-exercise-research-in-racehorses/>><<https://www.thehorse.com/136648/ct-scans-allows-quantitative-wobbler-syndrome-evaluation>>。

私たち日本ウマ科学会が世界に誇るこのJES、これからさらに発展するよう応援してください。

安斉 了（JES副編集委員長・（公財）競走馬理化学研究所理事長）

the HORSE TOPICS PROGRAMS NEWSLETTERS NEWS FEATURES BLOG

Scientists Pinpoint Equine 'Body Weight Genes'

These findings could eventually help veterinarians tailor medical care, feeding, and training to individual horses.

By Christa Lesté-Lasserre, MS | May 28, 2018 | Basic Care, Basic Conditions, Horse Care, Nutrition, Race and Events, Racehorse-Related Problems, Sports Nutrition

SHARE: [Facebook](#) [Twitter](#) [LinkedIn](#) [Pinterest](#)

How we feed, train, and manage horses can significantly impact their body weights. But one factor we have less control over also plays an important role: genetics.

Why this isn't a revelation in itself, what isn't clear is, rather, hasn't been known until now—what genes code for body weight. In a recent study, Japanese scientists identified four genes that appear to have direct, causal effects on body weight in the Thoroughbred racehorses they studied.

The genes—*LCORL*, *ZFAT*, *TRIB2*, and *MSTN*—are found, respectively, on Chromosomes 3, 9, 15, and 18. Combined, these genes accounted for 17% of the body weight differences in more than 800 horses. When factored in with sex differences, they accounted for a full 30%.

From ScienceDaily.com: Scientists have recently identified more genetic knowledge for horse management, health, and welfare, along with understanding what makes a horse tick. In a recent study, Japanese scientists identified four genes that appear to have direct, causal effects on body weight in the Thoroughbred racehorses they studied.

The genes—*LCORL*, *ZFAT*, *TRIB2*, and *MSTN*—are found, respectively, on Chromosomes 3, 9, 15, and 18. Combined, these genes accounted for 17% of the body weight differences in more than 800 horses. When factored in with sex differences, they accounted for a full 30%.

Journal of Equine Science

Vol. 29, No. 3, September 2018

和文要約

原著

馬の無症候性胃潰瘍における蛋白質バイオマーカー同定のためのプロテオーム研究での血清アルブミン除去プロトコルの最適化——Kanaporn POLTEP^{1,6}, Parichart TESENA², Yodying YINGCHUTRAKUL³, Jane TAYLOR⁴ and Tuempong WONGTAWAN^{5,6} (The Monitoring and Surveillance Centre for Zoonotic Diseases in Wildlife and Exotic Animals, Faculty of Veterinary Science, Mahidol University, ²Department of Clinical Science and Public Health, Faculty of Veterinary Science, Mahidol University, ³Proteomics Research Laboratory, Genome Technology Research Unit, National Centre for Genetics Engineering and Biotechnology, ⁴Biomedical Teaching Organisation, Biomedical Sciences, Edinburgh Medical School, University of Edinburgh, ⁵Department of Preclinic and Applied Animal Science, Faculty of Veterinary Science, Mahidol University, ⁶Laboratory of Cellular Biomedicine and Veterinary Medicine, Faculty of Veterinary Science, Mahidol University) …………… 53

臨床症状を伴わない無症候性胃潰瘍は、馬では一般的であるが簡便で有効な診断法がないのが現状である。プロテオミクスは血清バイオマーカーの同定に用いられるが、アルブミンを代表とする多くの血清タンパク質がその候補バイオマーカーを隠してしまう。したがって、プロテオーム研究を始める前にアルブミン除去を行う必要があるが、馬の血清から特異的にアルブミンを除去するキットや標準的プロトコールはない。この研究の目的は、馬血清アルブミンの除去プロトコールの最適化とアルブミン除去血清を用いた無症候性胃潰瘍の蛋白質バイオマーカーの同定である。胃潰瘍の確認には胃内視鏡を用い、健康な胃粘膜の馬と胃潰瘍の馬から血清を得た。血清アルブミン除去にはトリクロロ酢酸 (TCA) 沈殿法を用い、TCA 濃度、有機溶媒の種類、血清と蛋白沈殿溶液の割合およびインキュベーション時間を検討した。そして、TCA 沈殿前

後の電気泳動と画像解析により、アルブミン、免疫グロブリン G (IgG) および蛋白分解の量を比較し、プロテオーム研究 (電気泳動および質量分析) のために最も良いアルブミン除去法を選択した。結果は、プロトコール 2 (血清と溶液比 1:5, 10% TCA / アセトン, 90 分インキュベート) であり、分解した蛋白を除いた除去率はアルブミン (98%), IgG 重鎖 (80%), IgG 軽鎖 (98%) であった。電気泳動および質量分析の結果、KRT1, KRT6A および KRT18 が無症候性胃潰瘍の候補マーカーとして同定された。

子馬の休息行動の評価——村瀬晴崇¹, 松井 朗¹, 遠藤祥郎¹, 佐藤文夫¹, 羽田哲朗¹ (日本中央競馬会日高育成牧場生産育成研究室) …………… 61

サラブレッド種生産牧場における子馬の休息行動を評価し、発育に伴う推移および性別、天候、放牧時間の影響を検討した。子馬の後肢管部外側に 3 軸加速度計を 24 時間装着し、水平に傾いている時間帯を休息姿勢と定義した。さらに、頭絡に装着した 3 軸加速度計の角度から休息姿勢を横臥位と伏臥位に分けた。計測は離乳まで毎週連続した 2 日間行った。昼放牧期 (7 時間放牧, 2-60 日齢) は昼夜放牧期 (19 時間放牧, 32-152 日齢) に比べて休息時間が長く (44.6% vs. 27.7%), 休息回数も多かった (26.8 ± 7.4 回/日 vs. 15.3 ± 4.2 回/日)。放牧時間、放牧回数とも、昼放牧期は発育に伴った変化が認められたが、昼夜放牧期には認められなかった。また、休息姿勢のうち横臥位の占める割合は昼放牧期の方が昼夜放牧期よりも高かった (48.1% vs. 38.9%)。さらに、放牧地よりも馬房で休息する傾向があり (昼放牧期: 56.3% vs 16.0%, 昼夜放牧期: 52.5% vs 21.1%), 横臥位の占める割合もまた馬房で高かった。これらの結果から、日齢、天候、放牧時間が生産牧場飼育環境下におけるサラブレッド種子馬の休息行動に影響を及ぼしうることを示唆された。3 軸加速度計はウマの休息行動の評価に有用なツールである。

産駒の能力モデルによるクォーターホース種牡馬のランキング——Daniel T. KASPER¹, Rex F. GANDY¹ (Austin Peay State University) …………… 67

競走馬の種牡馬ランキングを作成するために、2016年の北米におけるアメリカンクォーターホース出走馬のデータを解析した。走破タイムと競走距離から算出した速度のzスコアを競走能力の指標として用いた。競走距離と種牡馬の産駒頭数に基づいて作成した様々な種類のデータセットを用いて混合モデルによる解析を行った。種牡馬のカテゴリ変数は変量効果とみなした。モデルを最適化するために、様々な統計学的な基準を用いた。構築されたモデルは、その後、変量効果と固定効果で分け、種牡馬効果のコンディショナルモードをこれらのモデルから抽出した。この解析による種牡馬ランキングの利点は、馬場、騎手、調教師、天候、その他速度に影響を与える要因の影響を受けないように制御していることである。典型的には、産駒の獲得賞金や勝利馬頭数のランキングが高い種牡馬の価値が高い。しかし、種付け料が安くても、このzスコアランキングを用いれば、高い能力を持つ産駒を生産することが可能かもしれない。このバーゲン価格の種牡馬は、比較的安い費用の投資で配当を受けることのできる速い産駒を生産できる可能性がある。この論文で述べた種牡馬ランキングモデルの方法は、種牡馬ランキングにおける新しい方法である。

短 報

プロポフォール投与方法の異なる3種類の麻酔法におけるbOSとbAPを用いたウマの酸化ストレスの比較——上林義範¹, 都築直², 徳重裕貴³, 草野寛一¹ (日本中央競馬会美浦トレーニング・センター,²帯広畜産大学,³日本中央競馬会競走馬総合研究所) …………… 75

手術に伴う酸化ストレスは、免疫抑制や創傷治癒の遅延を生じさせることがあるため抑制することが望ましい。プロポフォールは抗酸化能を有し酸化ストレスを抑制することがヒトにおいて報告されているが、ウ

マでの報告はない。本研究では、セボフルラン吸入麻酔下で関節鏡手術を実施した競走馬20頭における酸化ストレスをプロポフォール投与方法の異なる3種類の麻酔法で比較した。酸化ストレス指標として血中酸化ストレス度(bOS)と血中抗酸化力(bAP)を測定した。pP群(n=7)では導入時および手術中にプロポフォールを投与、pM群(n=7)では導入時にのみプロポフォールを投与、tM群(n=6)ではプロポフォールを投与しなかった。全群で手術終了時のbOSおよびbAPが手術前と比較して有意に低値を示し、各群間の測定値に差はみられなかった。競走馬において、セボフルラン吸入麻酔下での関節鏡手術で生じる酸化ストレスに、プロポフォール投与方法の相違による差は認められなかった。

急性腸炎発症馬の重症度予測を目的とした血液凝固機能の継続的評価——野村基惟¹, 溝部文彬¹, 加藤智弘¹, 黒田泰輔², 浦山俊太郎³, 村中雅則¹ (日本中央競馬会栗東トレーニング・センター競走馬診療所,²日本中央競馬会競走馬総合研究所,³日本中央競馬会美浦トレーニング・センター競走馬診療所) …………… 79

ウマにおける急性腸炎では、重症化すると血液凝固異常から多臓器不全へと進展し致命的な状況に陥ることが知られているが、これまで血液凝固検査値の変動と重症度との関係を調査した報告はほとんどない。本研究では、競走馬の急性腸炎14例について血液凝固系検査を入院時から5日間継続して実施し、各項目における検査値の経時的変化を生存群5例と死亡群9例で比較した。その結果、死亡群ではアンチトロンビン(AT)活性の低下とフィブリン分解産物(FDP)の増加が4日以上連続して悪化した。さらに、このうち6例ではトロンビン・アンチトロンビン複合体(TAT)の上昇を認め、上昇から2日以内に全て死亡した。これらの結果から、競走馬の急性腸炎では継続的に血液凝固検査を実施し、持続的なAT活性の低下とFDPの上昇に加え、TATの上昇を検知することが重症度を予測する上で有用と考えられた。

臨床委員会 DVD 販売のお知らせ

日本ウマ科学会臨床委員会では、過去に開催された臨床委員会主催の招待講演ならびに実習のDVDを販売しています。

<お申し込み方法>

以下の申込用紙をご利用いただくか、メールで事務局までお申し込みください。

<価格および代金のお支払い方法>

価格は1セット**3,000円**（税込）です。

お申し込み後、折り返し合計代金をご連絡いたしますので、ご確認の上、下記口座まで代金をお振込みください。納金確認後、宅配便にてお送りいたします。なお、お手数ですが送料は受取人様払いでお願いいたします。

郵便振替口座 記号番号：00130-3-539393

または

ゆうちょ銀行（9900）〇一九（ゼロイチキュウ）店 当座預金口座 539393

口座名：日本ウマ科学会（ニホンウマカガクカイ）

----- キリトリセン -----

申込用紙

ご希望のDVDと枚数	(1) 2009年（第22回学術集会）	Dr. Brooks	眼科	() セット
	(2) 2010年（第23回学術集会）	Dr. Richardson	整形外科	() セット
	(3) 2011年（第24回学術集会）	Dr. LeBlanc	繁殖	() セット
	(4) 2012年（第25回学術集会）	Dr. Dyson	跛行診断	() セット
	(5) 2013年（第26回学術集会）	Dr. White	急性腹症	() セット
	(6) 2014年（第27回学術集会）	Dr. Scott	装蹄	() セット
	(7) 2015年	Dr. Mama & Steffey	麻酔	() セット
	(8) 2016年（第29回学術集会）	Dr. Ducharme	呼吸器	() セット
	(9) 2017年（第30回学術集会）	Dr. Hyde	歯科	() セット
お名前				
ご送付先住所				
ご所属				
電話番号				
メールアドレス				

連絡先： 日本ウマ科学会事務局

FAX：0285-44-5676

e-mail： e-office@equinst.go.jp

住所：〒329-0412 栃木県下野市柴1400-4 JRA競走馬総合研究所

協賛団体名

団体名	〒	住所
日本中央競馬会	106-8401	東京都港区六本木 6-11-1 六本木ヒルズゲートタワー
地方競馬全国協会	106-8639	東京都港区麻布台 2-2-1 麻布台ビル

賛助会員名簿

(五十音順)

会員名	〒	住所
(株)アイベック	170-0002	東京都豊島区巢鴨 1-24-12 アーバンポイント巢鴨 4F
公益財団法人 軽種馬育成調教センター	183-0024	東京都府中市日吉町 1-1 東京競馬場内
公益財団法人 ジャパン・スタッド ブック・インターナショナル	105-0004	東京都港区新橋 4-5-4 日本中央競馬会新橋分館 6F
DS ファーマアニマルヘルス(株)	541-0053	大阪府大阪市中央区本町二丁目 5-7 大阪丸紅ビル 10 階
一般社団法人 日本競走馬協会	106-0041	東京都港区麻布台 2-2-1 麻布台ビル
公益社団法人 日本軽種馬協会	105-0004	東京都港区新橋 4-5-4 日本中央競馬会新橋分館 3F
一般財団法人 日本生物科学研究所	198-0024	東京都青梅市新町 9-2221-1
公益社団法人 日本装削蹄協会	111-0051	東京都台東区蔵前 4-5-9 O.T ビル 4F
公益社団法人 日本馬事協会	104-0033	東京都中央区新川 2-6-16 馬事畜産会館 7F
一般財団法人 馬事畜産会館	104-0033	東京都中央区新川 2-6-16
文永堂出版(株)	113-0033	東京都文京区本郷 2-27-18

Hippophile 投稿に関する基準

(2013年4月1日一部改定)

- ① 本誌の投稿は、Hippophile 投稿規程（以下「規程」という。）に基づくことを基本とする。
- ② この基準は、投稿者が投稿しやすいよう投稿分野ごとに細目を定めたものである。
- ③ 原稿を本誌の目的に沿ったものにするため、1～3名の審査員により審査を行い、事務局（(株)アイベック）を通じて投稿者と調整を行う。審査員の指摘を受けた投稿者は速やかに事務局に回答するものとする。その目的は、多種多様な本学会会員に対し、解りやすく美しい文章で、かつ投稿者の真意が正確に伝わる記事にすることにある。
編集委員（長）および審査員は、掲載の可否にあたっては、内容が特に営利目的でないもの、あるいは偏った個人批判、地域批判、団体批判を含まないものであることに留意する。
- ④ 本誌は、図表のカラー化を取り入れていることから、良好なピントや色彩を求める。
- ⑤ 本誌は、各号のページ数を刷上り約40ページとするため、投稿ページ数に制限を設ける。ただし、やむを得ない場合は、投稿者と協議のうえ、編集委員長がページ数を決定する。
- ⑥ 図は、写真を含めて図と称し、番号を付け、タイトルと説明文を付記することとする。その大きさは縦6.0cm×横8.5cmとするが、説明文のスペースの関係から図1枚につき縦約7cm取ることをとする。ページ数の調整の関係で編集委員（長）の一任により図のサイズを決定することがある。
- ⑦ 投稿者は顔写真（カラー）と略歴（150字程度）を添付することとする。
- ⑧ 刷上り最大24字×42行×2段＝2,016字の字数が1ページに印刷可能であり、これを目安に投稿することとする。
- ⑨ 図1枚の占めるスペースの字数は約168字となる。
- ⑩ 表にはタイトルと説明文のほか、必要に応じて注釈・解説文を添付することとし、表の大きさは、ページ数を考慮し、審査員と編集委員（長）が協議のうえ決定する。
- ⑪ 投稿者に原稿料（1ページにつき3千円）を支払う。ただし、原則として研究論文や施設紹介には支払わない。原稿料は、刷上りのページ数により算出し、ページ半分に満たない部分は切捨てとする。ただし、5ページ相当の原稿料（1万5千円）を上限とする。
- ⑫ 投稿者は、原稿内容により、以下の各コーナーの分類について要望又は指定することができる。

総説：

【ウマの科学的分野における研究の総括と展望】

- ① 文献展望を主体とし、刷上りは図表を含めて10ページ以内程度とする。

科学論文・一般学術論文：

【ウマ科学に貢献する未発表・他の学術誌に未掲載の和文論文】

- ① オリジナリティーの高いもの。

- ② 科学論文は、研究目的、材料・方法、成績・結果、考察、纏めが適切に記述されている自然科学の論文とする。
- ③ 一般学術論文は、自然科学に準ずるが、馬の文化、経済学、芸術、歴史などの人文科学の論文とする。
- ④ 刷上りのページ数は図表を含めて10～12ページ以内程度とする。
- ⑤ 引用文献の書き方はJESの投稿規程に準ずる。本文中のナンバーリングは上付きとし、引用文献順に掲載する。但し、著者名の記載は1名あるいは2名までとし、3名以上の場合は代表者1名を記載し「その他、あるいはet al.」として記載する。

馬事往来：

【馬との関わりについての提言、レポート、エッセイなど】

- ① 馬の文化や科学の実態を会員が相互に理解しておく必要性のあるもの。
- ② 刷上りのページ数は図表を含めて3ページ程度とする。

馬事資料：

【馬に関連する資料の掲載】

- ① 日本の馬事資料として保存しておく必要性のある内容のものを掲載。
- ② 刷上りのページ数は図表を含めて3ページ程度とする。

特別記事：

【馬に関連する競技会やイベント、利用実態などの記事】

- ① 馬に關係する各種催し物や活動状況などを紹介。
- ② 刷上りのページ数は図表を含めて3ページ以内とする。

馬事施設紹介：

【馬の文化・科学に関わる施設の紹介】

- ① 日本の馬事文化、研究、教育、乗馬等に関わりのある施設などの紹介記事。
- ② 刷上りのページ数は図表を含めて3ページ以内とする。

学術集会記事：

【馬に関する学術集会における講演内容等の掲載】

- ① 本学会の学術集会等を主体に掲載。
- ② 刷上りのページ数は図表を含めて3ページ程度とする。

関連研究会記事、その他：

- ① 規程に準じて取り扱う。
- ② 刷上りのページ数は1～2ページとする。
- ③ いずれのコーナーにも該当しないものにあつては、編集委員長が新たにコーナーを設けることができる。

投稿原稿送付先

Hippophile 編集事務局宛に e-mail もしくは郵送でデータを送付のこと。（投稿された原稿は返却しませんので予めご了承ください。）

e-mail: hippo@ipecc-pub.co.jp

〒170-0002 東京都豊島区巣鴨1-24-12

(株)アイベック内 Hippophile 編集事務局

編集後記

2018年アジア競技大会が9月2日に閉幕しました。馬術競技の日本選手団も馬場馬術団体戦での優勝を皮切りに近年にない好成績をあげました。是非この勢いを2020年につなげてもらいたいと思います。さて馬場馬術団体は、韓国が1998年のバンコク大会以来5大会連続して優勝してきていました。今回は日本が韓国に一矢報いた形ですが、その裏には韓国の朴槿恵大統領の政権崩壊が関係しているという見方もあるようです。前大統領のスキャンダルが露呈するとともに、それまで盛んだった韓国の乗馬熱が一変し、国内の乗馬クラブの会員が4割減ったともいわれています。また、サムスン財閥から韓国馬術界への潤沢な資金流入もなくなりました。ともあれ日本のよきライバルである韓国選手団も逆風にめげずがんばって欲しいと思います。

さて本号の最初の記事は高草操さんにエクスムーアポニーの最近の状況について、美しい写真とともにご寄稿いただきました。高草さんの旅の、自由で楽しい雰囲気を楽しんでください。こうした世界各地で飼養されている在来馬に関する最新のレポートは、知識がリセットされるという意味でも、とても貴重です。

郷倉嘉夫さんには東京農業大学オホーツクキャンパスで学ぶ学生たちの馬とのふれあいを報告していただきました。夏のオホーツク海での海上乗馬、極寒の雪原でのトレッキングなどの思い出は、卒業してこの地を離れても生涯のかけがえのない宝物となることでしょう。

3編目の馬事往来は矢野吉彦さんに、ご自身の近刊『競馬と鉄道』をご紹介します。この本、結構売れているらしい。競馬ファンと鉄道ファンのどちらも読みたくなる本なので、売り上げはダブルになるようです。一冊で二度楽しめる本書を是非お読みください。

(編集委員長 楠瀬 良)

入会申し込み方法

下記宛にお申し込み下さい。年会費は5,000円(国内)です。

日本ウマ科学会事務局

〒329-0412 栃木県下野市柴1400-4

JRA 競走馬総合研究所内

電話 0285-39-7398 FAX 0285-44-5676

E-mail : e-office@equinst.go.jp

Hippophile, No. 74, 2018

2018年9月発行

<http://jses.equinst.go.jp/>

編集委員長：楠瀬 良

発行者：青木 修

〒329-0412 栃木県下野市柴1400-4

JRA 競走馬総合研究所内

電話 0285-39-7398 FAX 0285-44-5676

郵便振替口座番号 00130-3-539393

または

ゆうちょ銀行(9900) 〇一九(ゼロイチキュウ)店

当座預金口座 539393

口座名：日本ウマ科学会(ニホンウマカガクカイ)

印刷者：株式会社 アイベック

〒170-0002 豊島区巣鴨1-24-12

電話 03-5978-4067